平成 21 年度学部入学式における学長式辞(平成 21 年 4 月 8 日)

埼玉大学の大久保キャンパスは、いま桜が満開です。春爛漫の今日ここに集われた 1,792 名の新入生、62 名の 3 年次編入学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私はこの壇上にご列席の理事･副学長、各学部長の先生方とともに、皆さんの入学を心から歓迎いたします。また、今日の良き日の式典にご臨席いただきましたご家族の方々に対しましても、心からお祝いを申し上げたいと思います。

さて、皆さんがこれから学生生活を始めます埼玉大学は、今年が創立 60 周年にあたります。本学は、1949 年(昭和 24 年)5 月、埼玉県に基盤をおく新制国立大学として、旧制浦和高等学校を母体とする文理学部と、埼玉師範学校及び埼玉青年師範学校を母体にした教育学部という、2 学部体制でスタートしました。このとき、大学の使命について、新関良三初代学長は次のように言っています。

「我々は大学の充実に当面は努力しなければならないが、更に将来は少なくとも 5~6 学部を有する大学に飛躍せしめたい。文理学部が文学部と理学部へ。更に工学部、医学部へと分立してゆけるように、その基礎を作っておく気概を持っている。大学の門は大きく開かれているであろう。だが、しかし、中核をなすのはおのずからの県の青年学徒であろう。青年がここに集り、研究を修め、教養をつみ、やがて経済界にあるいは教育界に活躍するであろう」(『埼玉大学五十年史』)

新関学長は、設立に至る経緯から、本学をもっぱら埼玉県に配置された国立大学として意識し、「日本」あるいは「世界」は視野に入っていませんが、意気込みのほどは皆さんにも十分伝わってくることでしょう。埼玉大学は、こうした先輩諸氏の努力によって築かれてきた基礎の上に立って、いま教養学部、教育学部、経済学部、理学部、工学部という 5 学部を擁する総合大学へと発展しています。その埼玉大学を目指して、皆さんのような有為の青年が、埼玉県だけでなく、日本全国から、さらには世界各国から集まってきているのです。そして、皆さんの先輩は、埼玉大学での学びを経て、経済界、教育界のほか、行政や学問、文学、マスコミの世界でも大変活躍されています。

いま、「百年に一度」と形容される世界的な経済危機のもとにあり、どの国も、どの分野のどの組織も、パラダイム・チェンジが迫られています。その一つの回答が、We can change といってアメリカ合衆国史上最初の黒人大統領となったバラク・オバマの「グリーン・ニューディール」戦略ですが、それが奏功するかどうかはまだ見えません。国立大学はこういう危機のなかで厳しい大学経営を余儀なくされていますが、埼玉大学は、創立後の 60 年に蓄えてきた知の伝統を踏まえつつ、いま「知の府」として一層存在感のある大学を目指して、新しい事業に次々と着手しています。新聞でも大きく取り上げられましたので、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、本学は 21 世紀科学のフロンティアになっている脳科学研究に本格的にチャレンジするために、本年 1 月に脳科学融合研究センターを設置しました。このセンターは、埼玉大学で展開されている脳科

学及び脳科学関連技術研究を結集し、生命科学、理学及び工学的見地から脳機能の解明と応用に関する研究を行い、その成果の還元を目指すことを目的とするもので、脳科学の世界的な研究センターである理化学研究所･脳科学センターとの間で緊密な連携関係を構築して、研究を開始しています。このほか、脳に負けず劣らず重要な世界的研究課題になっている環境についても、4 月に入って環境科学研究センターを立ち上げました。こちらは埼玉環境科学国際センターを連携研究機関にしています。

他方、教育面では、学生諸君が高度な専門知識に加えて幅広い教養と国際感覚を身につけ、社会に貢献できる溌剌とした市民･職業人に成長してもらいたいと考え、教育プログラムの充実を図っています。その一つが、全学教育プログラムの一つとして、この 4 月に新たにスタートさせた特別教育プログラム「Global Youth」、略称 GY です。この GY は、国際社会で活躍する人材育成を目指す国内でもユニークな教育プログラムであり、1 年間の海外留学、英語のスキル強化、国際関係機関や企業等でのインターンシップが盛り込まれています。GY については、4 月 10 日のガイダンスで詳しく紹介されることになっていますので、是非参加してください。

経済危機が今後どう進展することになっても、埼玉大学はこのような事業を着実に行うことによって、皆さんが学ぶ 4 年のうちに、研究面でも、教育面でも、キラリと光る大学になることを約束します。皆さん、どうか安心してください。そして期待してください。

しかし、ここで付け加えなければならないことがあります。それは、大学が輝きを増すためには、研究組織や教育システムを充実するだけでは不十分だということです。教職員と学生諸君の努力が不可欠なのです。とくに、皆さん、学生諸君の学びが重要です。大学での学びを通して、皆さんが 21 世紀のパラダイム・チェンジを担う人材へと成長していくことが、いま社会から期待されているのです。

では、そのために、皆さんは埼玉大学でどういう学びをすればよいのでしょうか。それは高校までの勉強とはどう違うのでしょうか。一言で言えば、高校までの勉強に対し、大学では皆さんは学問をするということです。高校までの勉強は、答が一つある問いがあらかじめ用意されていて、その答に到達するための知識と技術を教わること、と言えば皆さんには分り易いでしょう。そういう勉強の仕上げが大学入試だったわけです。

これに対し、大学では問題や課題そのものがどこにあるかを発見することが重要になります。そして、それをとことん考え抜く、そして解を見つける、そのことによって世界が違って見えてくる、それが大学における学びの醍醐味なのです。このような学びは講義の場でも必要となりますが、その仕上げになるのが、各学部に設けられている卒業研究･卒業論文です。学問とは、このように自ら問いを立て、考えぬいて解に到達する「知」の営みをいいます。もちろん、時には解が見つからないこともありますが、学問においては解が一つとは限りません。それもまた解なのです。もし、本当に困るようなことになれば、教員に相談してください。

もう 40 年も昔のことになりますが、私の経験を少し話しましょう。私は学部時代、労働問題研究を志しましたが、論文を書こうとして一番悩んだのはテーマの設定でした。日本の労働政策の歴史、あるいは労使関係の歴史をやることだけははっきりしていましたが、テーマがなかなか決まりません。そこで、ゼミの先生が書かれた論文、先生が引用されている文献をすべて読み、その上でテーマを決めようとしました。そのために、先生にお願いして、ゼミで取り上げる文献に私が読みたいものもいくつか加えていただき、解釈の手ほどきをしていただきました。ゼミではこういうことが可能なのです。時間がかかり、テーマが決まったのは 4 年生の夏休みのことです。治安警察法第 17 条と工場法の法理念の関係を問うというもので、一旦決まると、すぐ資料収集し、分析する作業に入りました。完成した論文は、私個人としては不満の残るものでしたが、その後大学院に進学してからの私の研究のベースとなりました。私は、出来不出来はあるにしても、テーマを見つけ論文という形で自分を文章表現する「知」の営みは、認識を発展させる上でとてつもなく大事なことだと思っています。

話を元に戻しましょう。私は大学では学問をするんだと言いました。しかしもちろん、基礎的な勉強、幅広い勉強が必要となることを忘れてはなりません。ここで、著名な英文学者にして、言語学者、エッセイストである外山滋比古さんの『思考の整理学』(ちくま文庫)という本から、卓抜な比喩を引用しておきましょう。

「人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある。受動的に知識を得るのが前者、自分でものごとを発明、発見するのが後者である。両者はひとりの人間の中に同居している。グライダー能力をまったく欠いていては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで、独力で飛ぼうとすれば、どんな事故になるかわからない。」

本学は各学部の専門教育プログラムのほか、全学開放型の教養教育プログラム、副専攻プログラム、テーマ教育プログラム、さらに先に挙げました特別教育プログラムなど、ユニークな全学教育プログラムを用意しています。学生諸君は、このような教育プログラムを活用することによって、「知」の世界の入り口に立つことが可能となるのです。

以上、大学における学びの特徴について述べましたが、こうして培われる「考え抜く力」こそ、知識基盤社会と言われる 21 世紀社会を市民･職業人として逞しく生きる力の源泉となると言わなければなりません。よく、変革を担うのは問題発見型、問題解決型の人材だと言われますが、私がいま話しましたことから、考え抜くことを基軸とする大学における学びの方法の繰り返しが、そういう人材を育てることも明らかでしょう。

大学時代の 4 年間は、皆さんが自立した生活を営むための準備する、そして、そのために失敗を含め自分を鍛える余裕を与えられたという、恵まれた時期にあたります。この時期を生かし、大学で学問を楽しんでください。こう言いますと、皆さんの中から、大学で学ぶというのは大変そうだ、そんなに楽しくなさそうだという声が聞こえてきそうです。そこで大学での学びを豊かにするために、そして楽しくするために、私は皆さんにできるだけたくさん読書することをすすめたいと思います。

本には、時代を超え、地域を超えた、「知」が埋め込まれています。読書は、そうした「知」の宝庫の扉を自ら開こうとする行為に他なりません。講義では参考文献が指示されますが、自分で面白そうな本を探す努力もしてください。また専門書だけではなく、色んな本を読んでください。因みに私は大学 1 年生の時に、ベートーベンをモデルにしたロマン･ロランの『ジャン・クリストフ』を読んで大いに勇気付けられました。1 冊の本が認識を豊かにしてくれるばかりか、人生を変えてくれることもあります。皆さんには、たくさん読書して、いい本に巡り会って欲しいと思います。

さて、私は学長に就任しました昨年 4 月から、埼玉大学に学ばれた諸君の先輩を入学式にお招きし、特別講演をお願いしております。昨年は、芥川賞はじめ主だった文学賞を総なめにされた小説家であり、詩人であり、そして文明評論家でいらっしゃる池澤夏樹さんにおいでいただきました。今日の入学式には、椎橋章夫さんをお招きしております。椎橋さんは 1976 年に本学の工学部機械工学科を卒業して当時の日本国有鉄道に入社され、国鉄の民営化後はいまの JR 東日本で Suica の開発責任者として活躍されました。椎橋さんは 2005 年 11 月 3 日の NHK プロジェクト X に登場され、また『自動改札の秘密』という本や『Suica が世界を変える JR 東日本が起こす生活革命』という本も執筆されていますので、ご存じの方も多いと思います。皆さんの先輩から、技術者の夢と開発に伴う苦労話が聞けると思いますので、どうか期待してください。

最後に、皆さんがこれから 4 年間、目標を高く持って、研鑽を積まれ、逞しく成長されることを祈念し、私の式辞といたします。

平成 21 年 4 月 8 日

埼玉大学長 上井喜彦